

神に賞賛される生き方 神の家族として 「神の家 真理の柱に立つ」

I テモテ 3 : 14~16

■ 自分のことだけを考えた祈り

聖書に登場するヒゼキヤは死の病を恐れ、神様に向かって泣きながら祈ります。預言者イザヤを通して「あなたの病は癒されぬ」と言われますが、それでも自分のことだけを思い祈ると、結果として「あなたの時は 15 年延ばされた」と言われます。ヒゼキヤは喜び、それでも証を欲しがります。神様は日時計の影をヒゼキヤの希望する方に動かされ、証明をされました。ヒゼキヤはその後 15 年人生を延ばされましたが、それまでの人生と比べ、よい年月ではありませんでした。神様は心の内の願いを聞いてくださいます。しかし、その願いが神様の御心でないものの場合、叶ったとしても結果として良いものになるとは限りません。私たちは神様の前に祈る祈りを整えなければなりません。

■ 罪人と認めるとき神様が働かれる

I テモテ 3 : 15 はこの手紙の目的であり、私たちがどのように行動すべきかを知ることだと書かれています。そのため先週までのメッセージで、男性と女性の役割、またリーダーとしてどう行動すべきかを学びました。それは外側を着飾るのではなく、非難されることなく、自分の家庭をよく治めることでした。しかし私たちはその通りできるかと言われるとできません。聖書の律法は、私たちを罪に定めるためではなく、私たちは失敗する者、罪人だということを伝えるためにあります。そして罪人であることを認めてイエス様のもとに帰ること、間違いを認めどう改めるかを聖書は教えています。旧約聖書では人が罪を犯したときどのように行動したかが記され、悔い改めなければ神様の怒りに触れることが分かります。しかし、私たちは自分の過ちを認めて謝ることが苦手です。ですから、ローマ書を通して自分が罪人だということを徹底的に学びました。そこで自分はダメだと思って終わるのではなく、「自分には何もできないと分かったとき、神様が造ってくださった元の姿に戻れるように祈ることで、神様が働いてくださることを知り、神様に栄光を返し、神様が油を注いで下さる」というよい循環が起ります。

■ 教会とは神の家、家族

テモテの手紙は、エペソの教会にテモテが派遣され、その教会でどのように牧会すべきかを書かれています。この内容は今日のすべての教会に送られているメッセージとも言えます。このころの背景は、アルテミス神殿に現わされているように外見を着飾り、それを神の家と考えていました。私たちは外見に目が向きやすいですが、内側を改めなければなりません。内側とは神の家、つまり家族です。神の家（オikos）とは建物を指しているのではなく、そこに集うすべての人を指しています。家族とは、途中で切れたり離れたりして終わることがありません。そして、教会に関わるすべての人が神の家の家族です。私たちは神の家族です。私たちの職場、学校、家庭などすべての場所が私たちに任された神の家です。そこで男として女として、父として母として、リーダーとして立ち位置を明確にし、評判がよくぶれることがないようにしなければなりません。

■ 目線が大事

そこで大事なのは私たちの目線です。聖書の中の多くの人物が、偏った目線で物事を見ています。例えば 5 千人の給食の記事を思い起こしてみよう。弟子のアンデレは 2 匹の魚と 5 つのパンを持っている少年に目を留め、それをイエス様に差し出しました。一方ユダは、5 千人以上の群衆を見て、イエス様に現実に出し難い表現ですが、反論に近い様子を伺うことができます。このように信仰の目線と現実の目線では全く見ているものが違ってきます。この記事から、信仰の目線で自らが感謝して裂いて隣人に分けたときに祝福は増え広がることが分かります。どちらの立場で見るかで、私たちが偏った見方をしてしまいがちです。そこで聖書には「神の家とは生ける神の教会のことであり、その教会は、真理の柱また土台です（I テモテ 3 : 15）」とあります。真理の柱の土台とは、私たちの心の内にある大切なもの、つまり私たちの目線で見たものや考えたものではなく、聖書が教えた十字架の恵みです。

■ 偉大な敬虔の奥義

十字架の恵みとは、16 節にある「敬虔の奥義」です。「キリストは肉に

おいて現れ、霊において義と宣言され、御使いたちに見られ、諸国民の間sに宣べ伝えられ、世界中で信じられ、栄光のうちに上げられた。」（I テモテ 3 : 16）これが「教会」です。

イエス様はご自分のすべてを投げ出し、私たちと同じ肉の身体で来てくださいました。そしてバプテスマのヨハネから洗礼を受けられた時、聖霊様が下り、義と認められました。ここでいう聖霊とは「ブニマハギオ」という「聖い霊・偉大な力」です。神様はイエス様を人々の前で聖い人として認められました。なぜなら人としてお生まれになったのに 40 日間の断食の中で悪魔の誘惑に遭いましたが、陥ることがなく、生涯罪を犯すことが無かったからです。またイエス様が生まれたとき、御使いたちが共にいて、神の臨在と御使いがいつもイエス様を守ったということは、神様の計画の中に彼がいたということが分かります。そしてイエス様が人々のために十字架に架かって恵みを残したということが、世界中に宣べ伝えられ、世界中で信じられ、栄光のうちに上げられました。

私たちはこの奥義を理解しているか、真理の土台に立っているか、外側だけを着飾っていないでしょうか。また、私たちの内側に真理の土台があり、失敗したときに自分が悪かったことを認め直すことができているでしょうか。そしてそれが教会で保たれているということを今日もう一度確認しましょう。あなたにたとえどんな地位があったとしても、外側で着飾ったとしても、この偉大な奥義を理解していないのなら全く意味がありません。あなたが存在するによって、神の真理の土台が内側に築かれているのです。私たちは教会で研ぎ合い、愛し合います。しかし、目線を間違えてしまうと、批判と捉えたり、関わらなったり、見て見ぬふりをしてしまい、「無関心の罪」となってしまいます。それは愛ではありません。神の家とは、私たちが関係ないと思うような人も含まれていて、その人への関心を失わず、愛そうとする場所です。

■ 真理の土台を持っている人は

神様は人類の救いの為の計画を持っていました。そしてイエス様はその計画に従いました。真理の土台がある人は、目的に向けて、そのために何をしなければならぬかを見ます。逆算し計画を実行します。反対に土台がない人は、明日をどうするか？目の前のこと、自分中心のことを考えます。だからこそ、先ほどから述べているように目線が大切です。神様の目線か？それとも自分の目線か？どの目線で物事を見ているかが大切なのです。

■ ジェーンアダムス

隣保館を作った人。富豪の家族のもと、大学を首席で卒業するような天才でしたが、骨髄の病気になる、妊娠もできない身体になり、すべてを失った彼女はアメリカを出ます。スペインの貧困の地域で、喜びに満ち神様に礼拝しながら過ごす人々を見て、自分が外側を見ていたことに気づき、このままでいいのかと人生を見直します。そしてアメリカに戻り、孤児院を開き、貧困の子どもや障がい者のための計画を築いていきました。彼女は身体に障がいを持ちましたが、目線を変えられたことで、神様の目線と本当の自分を取り戻すことができました。

さいごに…

私たちは目線がずれていないか、もう一度見つめなおす必要があります。私たちの心に、イエス様が十字架に架かってくださった真理の土台があるか、見極めなければなりません。物事がうまくいっていないときこそ、神様が働いてくださり、神様の計画が動いていることを知ります。外側も大事ですが、内側を見つめ、神様の御心にかなう願いになっているか祈っていきましょう。そして、神の家族と研ぎ合うことで、私たちの内側に真理の土台が建てられようとしていることを覚えましょう。

(要約者:神達 良子)

(2022 年 4 月 3 日)